

オジェゴフ辞典関連研究(1)

吉田, 衆一 / 甘粕, 和子

(出版者 / Publisher)

法政大学教養部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政大学教養部紀要. 外国語学・外国文学編 / 法政大学教養部紀要. 外国語学・外国文学編

(巻 / Volume)

115

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

16

(発行年 / Year)

2001-02

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00004821>

〈研究ノート〉

オジェゴフ辞典関連研究 (1)

吉田 衆一・甘粕 和子

言語は、時代と共に変化する。そのなかで、外来語は、最もセンシティブな、容易に出没する部分の一つと見ることができる。

ロシアでも、古くは、キエフ・ロシア時代にギリシャ語から文書のかたちで、また、中世にはチュルク諸語が口語による交流の過程で、一般共通ロシア語のなかに浸透した。それらのなかには、起源は外来でも、ロシア語のなかに定着して、もはやこれに代わるロシア語を持たないものも多い。しかし、18世紀以降は、ピョートル一世の領主・商人国家が強化された時代、ロシアにおける資本主義的関係の黎明期、貴族のバイリンガル生活時代、ナロードニキ、革命時代と、それらが借用されたそれぞれの歴史的、社会的時代背景を反映し、その運命もさまざまである。

ロシア、ソヴィエトを通じて初の規範的語義辞典、ウシャコフ辞典における外来語の収録は、どのようにになっているか？ これを、オジェゴフがその一巻もの辞典で、どのように引き継いだかについては、次稿で述べたい。

ウシャコフ辞典

1. 外来語、およびその収録に対するウシャコフの考え方

ウシャコフは、辞典の構想、計画等に関する審議の際に、興味ある見解や意見を展開させていたようだが、辞典編纂の理論的問題については何も書き残していない。従って外来語の収録に対する考え方も、僅かなことばの端々から窺うことしかできない。その一つとして挙げられるのは、レーニンのメモ「ロシア語の浄化について (Об очистке русского языка)」に関連するアンケート

に答え、“Журналист”誌1925年2号に発表した文章¹⁾である。レーニンのこのメモの内容は、同じ意味のロシアのことばが存在し、必要もないのに外国語の単語を使うことと、中途半端に学んだ外国語を混同してロシア語を歪めることに対する苛立ち、怒りを表わし、それらとの闘いを呼びかけたものであった。メモは、1919年か1920年頃に、集会における手すきの際に書かれたものだが、1924年12月3日付けの「プラウダ」に掲載され、無用の外国語排斥のキャンペーンに使われた節がある。例えば、17巻もの「現代ロシア標準語辞典」1, 2巻の編集責任者であったチェルスイシヨフ (В.И. Чернышев) は、「アカデミー現代ロシア標準語辞典構築の原則」²⁾のなかで、「生硬な外来語 (варваризм) との闘いで、われわれは、もっと慎重でなければならない。…レーニンも言っている外来語との闘い…“不必要な”外来語に対して、われわれは断固戦って行く。」と述べている。時代は少し下るが、オジェゴフ辞典2版への書評の中にも、これと全く同じ姿勢が見られるものがあり、レーニンのこのメモは、不要な外来語排斥の面だけが強調される傾向にあった。

「ロシア辞典史」³⁾は、「ウシャコフ辞典の執筆者たちは、その選定に当たり、外国語の不必要な借用は有害との従来からの考え方を支持していた。この考えは、古くから (ペリンスキーら) 言われており、有名なメモ“ロシア語の浄化について”のなかでレーニンによって述べられ、ウシャコフはこれを直ちに支持した (辞典の中では、単語 “будировать” と “дефект” の扱い方で、この考えが直接利用された)」と記している。確かに辞典のなかで、この二つの単語にはレーニンが指摘した通りの語義説明を付け、レーニンのメモそのものをも引用している。しかし、このメモに対するウシャコフの反応は、実際には、ここに述べられているニュアンスと多少異なっていると思われる。

すなわち、ウシャコフは、アンケートに答えた文章のなかで、このメモには、“外来語の不必要な使用”と“ロシア語の歪曲 (коверканье рус. языка)”という二つの問題が提起されていると思う、と、およそ次のように述べている：

「“ロシア語の歪曲”という表現は、私の考えでは、外来語の誤った理解よりも広い現象を含んでいる。…外来語の過剰な、正しくない使い方も、一般に、ロシア語の“歪曲”も、いずれも、標準語を十分に身につけていない人々に特有である。これは、不十分な習得、とりわけ、辞書の欠如にある。…考えを表現するには乏しい語彙、単純な単語よりも異色の単語をよしとすることが、時に、外来語に走らせている。…辞書を豊かにする、充実することを外来語を増

やすことと解し、一方、簡略化することは不必要な外来語から浄化することと解するなら、これは、事の一面にすぎない。…辞典を豊かに充実するのは、最も価値のあることで、できるだけ多数の単語、言い回し等、自分たちの一般に通用する文章語を身につけることにある。…」

さらに、「標準語は、空気のように、その無垢、純粹さを必ずしも誰もが評価できるものではない；悪い空気には馴れ、言語の不純さや歪みには気付かないものである。しかし、ピョートル大帝やプーシキンは、それぞれその時代に、ロシアの文化生活の曲がり角にあって、これに気付き思索している。レーニンにおいては、言語に関するこのメモだけではない。彼が、大衆に手の届くロシア標準語小辞典の編纂を考えたことは興味深い。彼の発意によって、1921年には、科学総局のもとに、このような辞典編纂の作業が組織され、予算がつけられて、数十人の要員がこれに携わったが、啓蒙人民委員部参事会の決定により、1923年秋に、作業は中断されてしまった。標準語辞典のような教材の価値を、多くの人々は理解しているのだろうか、と、問うてみよう。ちなみに、わが国には、このような辞典がこれまでなかったし、今もない。」と結んでいる。

なお、これを収録したウシャコフ論文集巻末の解説には：「レーニンのメモ“ロシア語の浄化について”に対する反響のなかで発表されたウシャコフの発言の意味は、“ロシア語の浄化”ということばのプリミティヴな狭い理解への警告にあった。“浄化”ということば自体は、単語のあるグループ排除の“キャンペーン実施”を呼びかけている。ウシャコフは、ロシアのことばのこのような“改善（улучшение）”は受け入れていなかった。…」と記されている。

レーニン発意の辞典編纂に、最初から携わっていたウシャコフは、大衆のための正しい標準語習得を目指す規範的語義辞典の必要性を強調し、再びその編纂を働きかけるために、このメモの真意をも生かしたかったのではないかと。ちなみに、ウシャコフは、この当時、「教育人民委員部参事会（1924年と1925年）や、科学アカデミー（1924年）、国立出版所（1924年）、ウシャコフが言語学部長を務めていた言語・文学研究所（1925年）、共産主義アカデミー（1926年）に、辞典を完成に漕ぎつけることを引き受けるよう、精力的に粘り強く働きかけていた。」¹⁴

一方、レーニンが、ルナチャルスキー宛てに、大衆のためのロシア語辞典編纂を提起する最初の書簡を書いたのは、1920年1月18日で、この「ロシア語の浄化について」のメモをレーニンに書かせた状況が、大衆向けロシア語辞典の

必要性をレーニン自身に痛感させ、積極的にその実現に向かわせたと考えることもできる。(このルナチャルスキー宛てレーニン書簡は、1940年1月21日になってはじめて「ブラウダ」に発表された。)

ウシャコフの考え方を窺わせるもう一つの片鱗は、辞典の序文で、ロシアにおけるロシア語語義辞典を歴史的に紹介するなか、「これらアカデミー辞典はロシア標準語の発展の歩みとは矛盾するものであった。主として教会文書語の形態による辞書の範囲の制限、ロシア語の話しことばの無視、外国語の排除、これらすべての結果、19世紀20～30年代における標準語の語彙の富の半分近くもアカデミー辞典の範囲外に取り残された。」と述べていることである。ウシャコフが、日常使われている外来語にも、ロシア語辞典における同等の地位を認めていることを示す一例と言えるのではないか。

2. ウシャコフ辞典における外来語の収録

前記の「ロシア辞典史」によれば、ウシャコフ辞典は、借用外来語の分野における収録を客観化 (объективация) するために、公認されていた出版物、すなわち、К.С. Кузьминский и др., “Словарь иностранных слов, вошедших в русский язык” (М., 1933) を利用した (また、この本の著者たちは、Е.Ефремовの “Новый полный словарь иностранных слов. Под ред. проф. Бодуэна де Куртене” (М., 1911) とその改版 (1926) を利用した)。さらに「ロシア辞典史」は、ウシャコフ辞典の外来語収録について、次のように記している：「外来語と最近の外国起源の単語の収録について、この辞典は、意識的な純粹主義を採ってはいない。…外来語提示の客観性については、つぎの比較例が証明している。当時セリシェフ (А.М.Селищев) が、20年代前半に一般に使われていた若干量の新しい外来語や外国由来の単語を挙げたが、それらの殆どがこの辞典には収録されている。例えば、*ажитаж*, *альянс*, *гегемон*, *генеральный*, *дауэсизация*, *дискредитация*, *диспропорция*, *картель*, *коммюнике*, *констатировать*, *лимит* и *лимитный*, *лимитрофы*, *модус*, *монолитность* и *монолитный*, *ориентироваться*, *пакт*, *рационализация*, *ревизия*, *ревью*, *рентабельность*, *солдафонство*, *солидаризация*, *стабилизация*, *стандартизация*, *стационарка*, *стимулировать*, *филиал*, *финиш*, *флуктуация*, *фордизация*, *функционер*, *шеф* (一語不足)、セリシェフが

挙げている38語のうち、収録されなかったのは3語（*авуалированный, лабораторизация, люмпен*）だけである（注：ウシャコフ辞典を確認してみたところ、*люмпен*は収録されていないが*люмпенпролетариат*が収録されている。また、ウシャコフ辞典では*фордизация*に外来表記はなく、*нов. экон.*との表記。なお、これらのうち、オジェゴフ初版に収録されていないのは、*альянс, дауэсизация, лимитрофы, стационарка, функционер, флуктуация, фордизация*の7語。ウシャコフに収録されなかった3語はオジェゴフ初版にもない。オジェゴフ2版には*люмпен-пролетариат*が復活しているが、これ以外は初版と同じ。）」

ウシャコフは、辞典「使用の手引き」の外来語の項に、極めて懇切な説明を添えて、収録した外来語に多くの情報を提供している。例えば、借用した外国語に、語義説明以外の語義がある場合は、*гуманный* [латин. *humanus - человеческий*] のように翻訳が記載され、また、その語義は外国語にもあるがその外国語の当初の語義が新しい語義の発生を理解するのに役立つならば、例えば、*декорация* [фр. *décoration*, букв. *украшение*] というように、当初の文字通りの語義が記載されている。また、提示のし方も工夫されて、例えば、単語*демуниципализация*に対しては [от латин. приставки *de - от, без, и слова муниципализация*] と記載され、*муниципализация*の項でその由来についての記載が見出だされて、*демуниципализация*の由来が、単にфр. *démunicipalisation*と記載されているよりもさらに明確である。

同一の外国語に由来する複数の単語がある場合は、重複を避け、スペースを節約するため、それらの内の一単語についてだけ記載し、その他の単語では語義解釈のなかで、いずれにせよ利用者が行き着くようにその単語が導入されている。例えば、単語*вольтижер*には、[фр. *voltigeur*] との説明があり、*вольтижировать, вольтижировка, вольтижировочный*には説明は付かないが、それらの語義解釈のなかに、*вольтижер*に行き着く間接的な記載が見出だされる。つまり、*вольтижировать - “заниматься вольтижировкой”*、また、*вольтижировка*には、“*гимнастические упражнения... производимые вольтижером*” 等々。これらの外来語にも当然文体表記が付けられているほか、*астро., лингв., мед., филос.* など使用の分野も示してある。

また、第4巻巻末には「外国の単語および表現 (*иностранные слова и выражения*)」一覧表があり、外国語流の発音のまま主としてラテン文字で書

かれた外国の単語および表現のうち、出版物のなかに最もよく現われる約250程（ラテン語、フランス語が97%を占める）が収められている。それらには、外国語を知らない人々に、これに近い発音を示すため、例えば、*homo sapiens* [гомо сапиенс]; *rendez-vous* [paʹdэ vу] など、ロシア文字表記の発音が付けられている。

規範的語義辞典に、外来語の情報をこれだけ盛り込んだのも、レーニンへのメモに対するさきのアンケートに述べられたウシャコフの考え方を反映、実践したと見るべきではないだろうか。

3. ウシャコフ辞典に対する当時の書評から

「ロシア辞典史」は、ウシャコフ辞典が「外来語あるいは外国由来の単語を、合理的・充分に収録」していると見ている。

一方、チェルヌイシヨフは、ウシャコフ辞典への書評¹⁵⁾のなかで、その外来語の収録について、次のように厳しく詳細に糾弾している：

「ウシャコフ辞典は、明らかに参考書的な目的を追求して、最新の外来語をも収録しており、ちなみに、ロシア語のなかではまだ招かれざる客であって、学者インテリの極く狭いトップ、あるいは、少数の専門家集団でだけ使われているようなものをも、殆ど何ら制限なく全面的に収録している。異国の単語が大量にあることは、この辞典のロシア的性格を乱し、ロシア語はもともと弱体で、外国から持ち込まなければ語彙が貧しく、わが国の利用者に応えられない、ロシア語そのものが、科学的概念の伝達には適応しない、と思わせかねない。ウシャコフ辞典の編集者達は、既に国際的に重要な、少なくとも重要になり得る、科学・技術用語で意義のある外来語だけでなく、翻訳小説のなかや、つぎつぎとフランス人やドイツ人やイギリス人に傾倒した古いインテリのことば、あるいは例外的に、広く一般には知られていない用語を鼻にかける不遜な専門家たちのことばのなかでだけ出くわす多くの外来語をも注意深く収録している。このような単語にとってのあるべき地位は、ロシア語のなかで出会う（ロシア語のなかに入ってしまったらはおらず、通常、必ずしも正確には書かれていない）外来語のための純粹に参考書の辞典と、学術的あるいは技術的な知識領域の特殊な辞典であると私は思う。標準ロシア語辞典に、つぎのような単語が果たして必要だろうか（注：念のため、ウシャコフ辞典（Yと略す）、オジェゴフ初版および2版（それぞれO-1、O-2と略す）、および17巻もの標準語辞典

(17Tと略す)を確認し、各単語の後のカッコ内に、これを収録している辞典の略号を記入した) : *a-ля* (У, 17T), *архитрав* (У, 0-1, 17T), *аскер* (У, 17T), *ауспиции* (У, 17T), *аут* (У, 17T), *бункер* (У, 17T, 0-1, 0-2但し0-1には外来表記はなく спец.の表記), *вирировать* (У, 但し外来表記はついていない), *виртуальный* (У, 17T), *ганаша* (У), *гутировать* (У), *гномон* (У), *дерматоз* (У, 17T), *дебушироваать* (У), *диагностировать* (У, 但し外来表記がついているのは диагноз, 0-1, 0-2, 17Tに収録されているのもこの単語で, 17Tではここに語群配列されている), *диатермия* (У, 17T), *зуммер* (У, 17T), *имматрикуляция* (У, 17T), *инсулин* (У, 17T), *кайман* (У, 17T), *коалировать* (У, 但しウシャコフでも外来表記が付してあるのは коалицияで, オジェゴフ初版, 2版, 17巻ものとも収録されているのは後者だけ), *кюре* (У, 17T, 0-1), *мадемуазель* (У, 0-1, 0-2, 17T), *мазальянс* (мезальянсの誤りでУ, 17T), *мерси* (У, 17T), *мизансцена* (У, 0-1, 0-2, 17T), *микст* (У, 17T), *миледи* (У, 0-1, 0-2, 17T), *мисс* (У, 0-1, 0-2, 17T), *миссис* (У, 0-1, 0-2, 17T), *мынко* (誤植かと思われ, いずれの辞典にも収録されていない), *марго* (У, 17T), *марморировать* (У, 0-1, 0-2, 17T), *мартингал* (У, 17T), *мумификация* (У, 17T, 但し0-1, 0-2ではмумифицироватьの項に語群配置されており, ウシャコフで外来表記がついているのも後者), *пардон* (У, 17T), *перистальтика* (У, 0-1, 17T), *соверен* (У, 17T), *сомон* (У, 17T), *стаффаж* (У, 17T), *сабайон* (У, 17T), *степс* (У, 17T), *стило* (У, 17T), *стилобат* (У, 17T), *страбизм* (У), *саж* (У, 17T) 等々 (注: 上記外来語のうち, 7割強がオジェゴフ初版で, 2版ではさらに2語削除されていることになる。また, 17巻もの辞典には, *вирировать*, *ганаша*, *гутировать*, *гномон*, *страбизм*以外のすべてを収録している。17巻辞典は, 規範的と銘打ちながら, 実は学術的なものを目指しているということか?) …そのような単語は, 追加しなければならない必要なロシア語や借用語があるのに, 如何なる利用者の共感も得ていない, 押し付け的に大衆に提供される単語に類する。ウシャコフ辞典の編集者たちがこれらを重視しているのは明らかだが, 恐らく, 彼らは誤っている。]

また「ウシャコフ辞典の第4巻に, “前3巻に対する補足”(注: 第4巻末に付けられた前記の一覧表 “外国の単語および表現”とは別。)がつけられている。

これらは、主として異国語から成り、それらの語の価値や必要性は、時として、大いに疑わしい。例えば、*авизо* (Y, 17T), *автоклав* (Y, O-1, O-2, 17T), *агреман* (Y), *аллоскоп* (Y), *анамнез* (Y, 17T), *брижд* (Y, O-1), *вальтрап* (Y), *грейдер* (Y, O-1, O-2, 17T), *джоуль* (Y, 17T), *драить* (Y, 17T), *каюр* (Y, 17T), *кетгут* (Y, 17T), *панетри* (Y), *радикулит* (Y, 17T) のような単語である。(注：これで見ると、オジェゴフ初版が収録しているのはこのうちの3語、2版は2語だけ。一方、17巻ものの方は、チュルヌイシヨフが関与した1, 2巻でも、何故かかなり多くを収録している。)

ウシャコフ辞典に収録されている借用語の選択には厳密な方針がない、というのが私の結論である。…

ロシア標準語への外来語の導入については、われわれの生きた標準的なことば (*живая и литературная речь*) の外来語による汚染との闘いが、既に久しく行われていることを忘れてはならない。18世紀には、スマロコフ (А.П. Сумароков) が、異国語の過度な使用に対して烈しく反対を唱えた。フォンヴィーゼンは「 Бригадир」のなかで、考え方や言語におけるフランスかぶれを嘲笑した。…現代では、レーニンも、必要性の殆どない異国語の使用抑制に関する問題を敏感に、時宜を得て提起した。…ロシア辞典学は、何者にも妨げられることなく大量に無秩序に国語に流入する異国語の盲目的な侵入の事実に進歩すべきではない。同様な、多かれ少なかれ死んだ、怪しい非ロシア的要素、一種の見せかけを、ロシア標準語辞典に持ち込むことは、それらの価値の一種の認知であり、それらの利用を或る程度承認することである。ここでは、不支持を、合理的な抵抗を、計画的な対抗を示す必要がある。日常的なロシア語、労働の、最も単純な技術は、外来語的表現 (*варваризм*) を全く必要としない。仕立て屋や靴屋は、一般に通用していたロシア語 *починка* の代わりに *ремонт обуви*, *ремонт одежды* という表現を使い始めた。床屋たちは、近頃、頭髪の *парманентную* ウエーヴをやっている。しかし、これが、ロシア語を損なうことでなくて果たして向上だろうか、われわれの言語は、これを忍耐強く受け入れるべきだというのだろうか？ 勿論、学問的な、特に言語学的な仕事も、学術的な単語：*структура*, *концепция*, *дифференциальный*, *конструировать*, *функциональный*, *серия*, *омонимия*, *антитеза*, *аграмматический*, *нумерализация*などを散りばめずに、或る程度判りやす

編集委員会に改組され、科学アカデミー辞典委員会に、その資料、つまり、カード・ファイルの利用許可を依頼、「ペトログラードに、ペトログラードの熟達した言語学者のうちの一（あらかじめЛ. В. Щербаが予定されていた）の指導のもとに5～6名の作業グループを組織すること」を決定した。このために1921年8～9月には、ウシャコフ、グリヴェンコ、サクーリンらがペトログラードに出張している。しかし、ウシャコフの日記的メモによれば、モスクワの編集委員会とアカデミーの委員会とのつながりは、一方的なものではなく、モスクワ辞典の編集委員会によるアカデミー委員会への援助によって、辞典の資料整理は大幅に進められた（アカデミー辞典委員会の膨大な資料ファイルは、ドイツ軍のペトログラード侵攻の脅威を避けるため、革命直前に、サラトフに移されていたが、1920年12月に返送され、整理が始まっていた）。

革命前のアカデミー辞典編纂者たちは、見出し語彙の選択に当たり、主として文芸作品をもとにした。19世紀90年代以来、シャフマトフの下でシソーラス的な「ロシア語辞典」を編纂していた科学アカデミーの所有に属したカード・ファイルは、古典作家からの最も豊富な資料を含んでおり、19世紀の主な作家の語彙は、或る程度完全に網羅していた。

「モスクワ辞典」の計画は、19～20世紀の文学作品と現代の新聞雑誌に基づくことになっていた。このため、モスクワでは、レーニンやゴリキーの作品をも含む19～20世紀の作家や20世紀初頭以降の大部分の定期刊行物から選んだカード・ファイルが作成された。単語および引用資料は、67名の最近の著者から選択された。すなわち、社会活動家では——Г. В. Плеханов, П. А. Кропоткин, А. В. Луначарский, Н. М. Морозов, М. Н. Покровский；散文家では——В. Вересаев, А. Куприн, Н. Ляшко, А. Ссрафимович, С. Сергеев-Ценский, Н. Телешов, А. Н. Толстой, И. Шмелевその他、詩人（詩人は特に多く、或る程度時代の好みを反映していた）——В. Александровский, И. Анненский, Н. Асеев, А. Ахматова, К. Бальмонт, Д. Бедный, А. Белый, А. Блок, В. Брюсов, М. Волошин, С. Есенин, О. Мандельштам, В. Маяковский, Б. Пастернак, И. Северянин, В. Хлебников, М. Цветаева等々であった。また、ロシアの民主主義的哲学、マルクス主義哲学や、革命的社会・政治評論家の著作が文献資料として使われた。レーニンの著作からの語彙選択作業も特別なプログラムに従い、哲学者、学者、社会・政治評論家としてのレーニンに特有な単語が収録された。それらは、何よりも先ず、辞典学的に定着させ、しか

るべく語彙的に説明する必要がある、と見做された。

1922年5月における作業進行状況報告には、アカデミー辞典A項から3項までの資料整理が完了し、要員を学術的な作業とモスクワのためのカード転写作業に移すことが可能となって、4月初めから20日間にその中から3,000枚がモスクワのために転写処理され、5月中旬にモスクワに送られた旨の記述が見られる。その後、1922年11月12日付けの辞典委員会の報告書によれば、ペトログラードのスタッフは、100万枚のアカデミー辞典カード・ファイルのなかから、29,000枚を超えるカード・ファイルを選出転写した。

約130,000枚の新たなカード・ファイルができて、現在160,000枚を有し、ペトログラードからくる筈のものも入れると、この数は、185,000～190,000となる、と、ある。

しかし、この辞典編纂作業は1923年に挫折した。1927年になって、再び、大衆向け現代ロシア語辞典の編纂が実現に漕ぎつけた時、新しく生まれるウシャコフ辞典はこれを引き継がなかった。アカデミーロシア語辞典の流れを汲む辞典学者たちではなく、ソヴィエト時代になってから学者となった新しい力——ヴィノグラードフ、ラーリン、オジェゴフ、トマシェフスキーらレニングラードの著名な言語学者たちを引き入れ、後にモスクワのヴィノクールが加わったウシャコフ辞典の編集者たちは、従来の語彙資料カードを利用しないと決めたのである¹⁷⁾。

それでは、従来のカード・ファイルのその後の運命は——、「1934年における科学アカデミーの活動報告 (Отчет о деятельности Академии наук СССР в 1934 г.)」に見ることができる：「レーニンの特別割り当てにより1920年代に造られた14万枚のカードの特別カード・ファイル集」をモスクワから受け取った旨報告されている。このカード・ファイルは、現在に到るまでロシア科学アカデミー言語学研究所 (Институт лингвистических исследований РАН)¹⁸⁾ 辞典課の文書保管所に保管されている。ここには、さきの編集委員会の11月12日付け報告に比べ、約20,000枚の誤差があるが、それは、時間節約のためモスクワで、既存の辞典類 (П.Н.Стоянь: “малый толковый словарь рус. языка”, Н.П.Макаров: “Полный русско-французский словарь”, И.Я.Павловский: “Русско-немецкий словарь” 等々) を基礎として、つまり、新たにではなく作製したものとも考えればよいか、確認のすべはない。

かつて科学アカデミーの本拠であったレニングラードの科学アカデミー辞典委員会が所有したカード・ファイルと、モスクワで作業が進められたウシャコフ辞典のカード・ファイルとの関係は、ここで切れた。

前記「ロシア辞典史」によれば、戦後、ウシャコフ辞典の改訂版が企画されたが、当時、科学アカデミー文学・言語部書記であったヴィノグラードフは、機動的に改訂できるような基礎的カード・ファイルがないこと、1942年のウシャコフ死後、執筆スタッフは四散したことの二つの事情からこれを断念し、新しい辞典の作製を提案した（その新しい辞典とは、エヴゲーニエワ（А.П.Евгеньева）の4巻ものとなった、と同書は記している）。

ちなみに、1935年に出版されたウシャコフ辞典第1巻の扉頁には Государственный институт “Советская энциклопедия” との記載があり、そのアドレス（Москва, Орликов пер., 3）は、2巻以降の出版所 Изд. иностран. и националь. словарей: Москва, Орликов пер., 3, Дом Книги と同一で、こちらには Гос. Институт “Советская энциклопедия” の記載はない。

1944年に科学アカデミーロシア語研究所がモスクワに設立され、その словарный сектор だけは、膨大なカード資料と共にレニングラード支部に残った。1949年刊行のオジェゴフ辞典初版の扉頁に記載された発行者はソ連邦科学アカデミーロシア語研究所（Москва, Волхонка 18/2）、出版所はウシャコフ辞典2巻以降と同じ Изд. иностран. и националь. словарей だが、1952年刊行のオジェゴフ辞典2版の問い合わせ先は、同出版所またはソ連邦科学アカデミー言語学研究所（アドレスはロシア語研究所と同じ）となっている。

この言語学研究所は、スターリンの言語学理論によってもたらされたソヴィエト言語学における転換の結果⁹⁹⁾、ソ連邦科学アカデミーの旧言語および思考研究所とロシア語研究所を基盤に、1950年、モスクワに設立され、レニングラードに支部がある。一般言語学、ソ連邦諸民族語ならびに諸外国語を研究する指導的な学術研究機関¹⁰⁰⁾で、ヴィノグラードフが1954年まで初代所長を務めている。その間、1952年8月の科学アカデミー幹部会決定により、この研究所内に сектор культуры речи が設けられた。オジェゴフは、「言語学の諸問題」誌1953年1号に “Сектор культуры речи Института языкознания АН СССР и его задачи” と題して、この新しい сектор に対する抱負を述べている。これによれば、ソ連邦諸民族語を含む言語の規範化、とりわけロシア語の

規範化やその標準語の理論的研究と、実際の参考書類、ことばの文化向上に資する各種辞典の編纂との二つの方向を目指している。その後1955年からは、ここで、オジェゴフが主宰するロシア語関連の不定期刊行理論誌“Вопросы культуры речи”も刊行されている。同誌2号（1959年）の発行所がロシア語研究所に移っていることから判る通り、このсекторは, отдел культуры рус. речиとして、やがて、ロシア語研究所に属することとなる。いずれにせよ、オジェゴフ等の活動拠点であった。

従って、モスクワのロシア語研究所が所有するカード・ファイルは、ウシャコフ辞典の流れは汲むが、主としてオジェゴフ辞典編集に際して作製されたものに、共時性を追求すべく常時改訂が加えられている。更に言えば、オジェゴフのモスクワ移転⁽¹¹⁾と共に、ウシャコフ辞典はモスクワだけを拠点とし、それ以降、モスクワの辞典編纂は、レニングラードの科学アカデミーの影響を受けずに、「ことばの文化向上を目的とする言語の規範化という与えられた課題に従い語彙の選別を行う」⁽¹²⁾ 共時的な規範的辞典を目指している。そして、これは、同時に、国の言語政策、党中央の支配を、否応無しに大きく受けることをも意味していた、と言えるのではないか。

一方、現在のロシア科学アカデミー言語学研究所は、シャフマトフの後、その困難さ故にシソーラスの方針を捨てはしたが、伝統的な大型、学術的、どちらかといえば文学重視の辞典編纂姿勢を続けてきた。編纂に数十年を要する大辞典は、当然、通時的な性格を持ち、規範とは両立しないにも拘らず、規範的と銘打っている17巻もの辞典、文学作品からの引用文を多数採り入れているエヴゲーニエワの4巻もの辞典⁽¹³⁾の基礎となったのは、その大量のカード・ファイルである。このカード・ファイルには、常時、新たな資料が加えられ、1998年には、「ロシア語大語義辞典」⁽¹⁴⁾を生み出している。また、かつて、モスクワのロシア語研究所が党からの強い規制を受けていたのに対し、こちらには、それを最少に止めたいとの努力と誇りがあったことも窺うことができるのではないか？ レニングラードのアカデミーが、マルの影響を大きく受けた、とオジェゴフが述べている⁽¹⁵⁾ こと、また、「言語学百科事典」⁽¹⁶⁾が、ロシア語研究所の項に、「(レニングラードにある) 辞典部はソ連邦科学アカデミー言語学研究所の管理に属する」と記載し、言語学研究所の項には、レニングラード支部の組織を列記した末尾に「ロシア語辞典部は、学術的にはソ連邦科学アカデミーロシア語研究所に属する」と記している両研究所のねじれ現象など⁽¹⁷⁾も

複雑に絡み合っているように見える。

ソ連邦崩壊後、1992年に出版された「オジェゴフ・シヴェードワ辞典」(オジェゴフ辞典24版に相当し、初めてシヴェードワの名も冠されるようになった版)の序文のなかで、シヴェードワがつぎのように述べているのは極めて興味深い：

「重要な側面は、この辞典が、いわゆる概念の、外部から押し付けられていたイデオロギー的、政治的な特徴付けや評価から全面的に解放されたことである。それらは、これまでの版には、さまざまな程度で(21版には最少程度)存在し、執筆者たちも編集者も、これを抜け出す状態にはなかった。この度、これらの特徴付けや評価はすべて徹底的に取り除かれた。偏向的な調子に彩られた用例や注記、古くなった語彙の領域に強制的に入れられていた若干の語についても同様である。イデオロギー的および政治的な概念の分野に属する大量の語はすべて、この新しい辞典では、本来の語学的記述となった。

読者は、この辞典のなかで、最近数年にロシア語の語彙に起こっている変化を反映しようとの志向に気付かれるだろう。まず第一に一般標準語(общелитературный язык)における変化や、広く普及している政治的、専門的および職業的な語彙における変化にも及んでいるのは当然である。隠語的表現、明らかに忽ち消えてしまう短命な語、同じ意味のロシア語が存在する翻訳借用語や、そのままの音で言葉のなかに現在広く浸透している多くの外国語は、極めて慎重に収録した。それらは、まだ時間によるチェックを経る筈だからである。

新しい辞典のために、閉ざされた概念的(замкнутый понятийный)領域に属する一連の語は、すべて、改めてチェックされ、可能な限りの確に説明された。これはまず第一に、宗教や教会の概念を指す語や語結合に関連するものであった。ソヴィエト時代に出版されたもので、この語彙が多少なりとも完全での確に記述されたロシア語の一般語義辞典は一つもない。いくらかの例外と見ることができるのは、大アカデミー「現代ロシア標準語辞典」(1~17巻、1950~1965)だけで、これには、しかるべき言語の価値を守ろうとした古い専門家の努力が反映されていた。…」

シヴェードワは、オジェゴフを助けて第2版から編集に参加しているが、既に初版に対する詳細な書評を書いており、半世紀に亘って殆どその最初からこの辞典に携わってきただけに、述懐ともいえる上記の内容は多くのことを物語っている。

〈注〉

- (1) Д.Н.Ушаков: “Русский язык” М. “просвещение” АО “Учебная литература”. 1995. стр. 254-256.
- (2) Принцип построения Академич. словаря современ. рус. “литературного языка”. Избранные труды в 2-х томах. Изд. “Просвещение”, Москва, 1970. т.1.但し, この“原則”を実際に執筆した年月は不明。
- (3) “История рус. лексикографии”. Ответ. редактор Ф.П.Солоколетов. С.-Петербург, Наука, 1998.
- (4) Левашов Е.А., Петушков В.П.: “Ленин и словари”, Л. “Наука”, 1975.
- (5) В.И.Чернышев: “Толковый словарь русского языка” (критический отзыв). Избранные труды в 2-х томах. Изд. Просвещение. М., 1970. т. 1.
- (6) 1939年5月26日にモスクワで開かれたこの会議の席で, 報告者の一人であった編集長チェルヌイシヨフに対し, ウシャコフは, 参考辞典, 規範的辞典を目指すとしながら引用文を多用して15巻にもなるこの辞典は誰のために必要なのか, と食いつかり, 3巻の予定が4巻になるウシャコフ辞典さえ, 大衆に使われるには大きすぎて, レーニンの遺言には添わない, と発言している。時期的に見ても, ウシャコフは1巻ものを早急に編纂する必要性を痛感していたと思われる。さらに, 巨大辞典の価値は引用文にあるが, 一般の辞典には, 引用文より, 適切な例文の方が有用, と述べているのも興味を惹く。序でだが, この発言の中で, 小さな問題としながら, 語群配列を避けることもアドヴァイスしている。
- (7) Левашов Е.А., Петушков В.П.: “Ленин словари”
- (8) 1991年以降。それまではロシア語研究所レニングラード支部であった。
- (9) “Открытое расширенное заседание учен. совета Института языкознаний АН СССР, посвящен. годовщине выступления И.В.Сталина по вопросам языкознания”. Известия АН СССР, ОЛЯ. 1951, вып. 5, стр. 508.
- (10) 1979年版の「ロシア語百科事典」“Русский язык” Энциклопедия. Изд. сов. энц.による。
- (11) 1936年。ЦК ВКП(б)出版部の招きと, ウシャコフ辞典の作業促進に関する同中央委Оргбюроの決定による——Скворцов, Л.И.: С.И.Ожегов. Изд. Просвещение, 1982.
- (12) С.И.Ожегов: “Вопросы лексикологии и лексикографии”.
- (13) Академіе小辞典ともいわれ, 初版: 1957~1961, 2版: 1981~1984.
- (14) “Большой толковый словарь” глав. рудактор: С.А.Кузнецов. 1巻もの, 収録語数約13万語。
- (15) С.И.Ожегов: “О трех типах толковых словарей современного рус. языка”. Вопросы языкознания, 1952, №2.
- (16) “Лингвистическая энциклопедия” М., Изд. Сов. Энциклопедия. 1990.
- (17) マルの影響を強く受けたФ.П.Филингが, 1954年に言語学研究所レニングラード支部の辞典部長となり, 17巻もの「現代ロシア標準語辞典」6巻以降の編集委

員長を務めている。この17巻辞典も、58年刊行の7巻までは発行者が言語学研究所、59年刊行の8巻以降はロシア語研究所発行となっている。

(吉田衆一 ロシア語・第一教養部教授)